

当たり前の日々

高崎市立塚沢中学校

三年 成田 小桃

「いつ降ってくるかわからない爆弾・次々亡くなっていく仲間たち」

これは家族旅行で沖縄を訪れたときに立ち寄ったひめゆりの塔の資料館で目にした言葉だ。その一文を読んだ瞬間、私は息が止まるような感覚を覚えた。それまで、沖縄と言えば、明るくきれいなイメージしかなかった。きれいな海、どこまでも続く青い空、おいしい郷土料理、地元の人々のはじけるような笑顔。暑いはずの沖縄が、その場所だけ涼しく感じられた。壁一面に並ぶたくさんの写真、それを見て私は足が止まった。そこに映っていたのは私と同じくらいの年齢の少女たち。友達と笑い合っているその姿は、今の私達と変わらないように見えた。しかし、実際は想像もつか

ないような日々を送っていたらしい。笑い合っているその姿の裏で、血まみれの兵士を看護し、休む暇のないまま命がけで食料を調達しに出かける。そんな過酷な状況の中を彼女たちは必死に生きていた。

資料館の外に出て、空を見上げた。そこには当時の少女たちも見たであろう青い空が果てしなく広がっていた。そこで私はふと、自分の生活を思い返した。朝、母に起こされ、文句を言いながら用意されてあるご飯を食べる。学校に行けば、授業をなんとなく受け、おいしい給食を友達と会話しながら食べ、部活動で汗を流す。学校から帰ったらすぐテレビをつけソファに寝転ぶ。早く宿題をするよう母に急かされても、ただ何となく時間を過ごす。やるべきことはたくさんあるはずなのに「後でいいや」と後回し。そんな何気ない日常がどれだけ恵まれており、どれだけ大切なのかを私は一ミリも理解していなかった。当時の少女たちは生きていくのに必死で、来るかわからぬ明日を夢見ては「生きたい」そう願いながら目の前にある激務をただただこなす。本来なら勉強をしたり友達と夢を語った

りしていたはずなのに。私は毎日おびえるものもなく、平和な社会を生き、明日が来るなんて当然のことだと思っっている。しかし、本当は、私の生活はすべての面で恵まれているからこそ成り立っているのだ。朝ご飯を用意してくれる人がいること、そもそも好きなだけ好きなものを食べられること。学校に行き、先生に勉強を教えてもらえること。友達と思いつきり部活をして、体を動かせること。帰ったら思う存分だらけて、ゆっくり休めること。それは、私が平和な時代に生きていて、周りの人たちが私をいつも守り、支えてくれているおかげなのだ。ひめゆりの少女たちが私にそれを気づかせてくれた。

私の当たり前は、彼女たちが望んでも手に入れられなかった日常。そう考えると、当たり前だと思っていた日々はとても尊くて、貴重な時間の積み重ね。一瞬一瞬を大切にしたい。そう思えるようになった。

私は今年、中学三年生になった。「受験生」と言われる学年だ。将来を考え、自分で初めて進路を選ぶ。そんな選択ができること自体、平和な時代に生きている

「証」なのだ。そして、自分の気持ちを最優先して、進路を決められるのは、周りの人々の支えと環境が私にその当たり前を与えてくれているからなのだ。ひめゆりの少女たちが願った未来を私は今、生きている。だからこそ、私は私の当たり前の日々を後悔しないように生きたい。特にこの一年をどう過ごすかで将来が変わってくるだろう。私に与えられている、学ぶことにまっすぐ向き合える日々を、感謝の気持ちを持って、最大限の努力と前向きな明るさ、そして小さな一歩を積み重ねて歩んでいきたい。その先に、素晴らしい当たり前の日々がまた続いていくと信じて。